

カルサ・マーチー女児の選別堕胎との戦いに目覚めた町、スリガンガーナガル ミータ・シン（インド）

スリガンガーナガルは、インド最大の州であるラジャスタン州の端に位置する賑やかで土地の肥えた町で、ラジャスタンの穀物倉庫と呼ばれています。しかし、悲しいことに、児童人口の性比の開きがラジャスタン州で最も大きいことで悪名をはせてもいる町で、0～6歳の年齢層では、男児1,000人に対し女児は850人ほどです。人口の大半はシーク教徒ですが、シーク教コミュニティにおける児童人口の性比の開きは非常に大きく、男児1,000人に対し女児786人となっています。そのため、スリガンガーナガルのシーク教コミュニティはこの風潮を変えることを誓いました。

ラジャスタン州の州都ジャイプールのコミュニティでは、74歳の女性リーダーであるカウルのもと、女児の選別堕胎問題と闘っています。カウルがこの問題に目覚めたのは、2005年10月に米国国際開発庁（USAID）の後援でラジャスタン大学女性協会（RUWA）と国際非営利団体のIFESが開催した、コミュニティ・リーダーたちの啓発のための勉強会に参加したのがきっかけでした。彼女はまず、ジャイプールにある20のシーク教寺院それぞれに、女性の信仰グループを構成することから始めました。毎月、この女性グループは寺院の1つに集まり、この問題について話し合い、胎児の性別選択および女児の選別堕胎をしないよう、メンバーたちに固く約束させています。さらに、カウルはスリガンガーナガルのシーク教の信徒団と連携を取り、2006年11月にこの地域で合同結婚式が執り行なわれた際には、1,000人の参列者と新婚20組が胎児の性別選択および女児の選別堕胎に反対する宣誓をしました。

さらにスリガンガーナガルのシーク教コミュニティは、2007年2月25日、カルサ・マーチーという行進を行い、社会から女児の選別堕胎を根絶するべく声を上げました。それは草の根レベルで非常に多くの人びとが結集した、たぐいまれなものとなりました。大群衆が行進の出発点になったシーク教の聖なる寺院、ババ・ディーブ・グルドワラに集結し、コミュニティからの要請を受けて何百kmもの距離を駆けつけてきた、パンジャブ州とビハール州の首席僧侶たちが行進を先導しました。

大行進の先頭には、巨大な花で飾られた透明なガラス張りのパールキと呼ばれる四輪馬車が走り、その中にしつらえられたオレンジ色のサテンで覆われた台の上には、シーク教の聖典グル・グラント・サーヒブが置かれました。馬車の脇に立つ若い僧侶が、一方の端に白い綿菓子のような房が付いたチョール・サーヒブと呼ばれる杖を、敬意のしるしとして聖典の上でやさしく左右に揺らし、ラージスという歌手の団が軽快な音楽に合わせて聖歌を歌いました。

聖歌がだんだん消えていった後、今度はスピーカーから、コミュニティの若きリーダーが人びとに子宮内のまだ見ぬ女児を抹殺するのを止めるよう訴えかける、強く自信にあふれた声流れ出しました。聖職者たちも会衆に向かって話しかけ、女児を殺害する者は何

人といえども犯罪者であり、社会から追放されるべきだというグルの戒律を、聖典から引用して聞かせました。

大行列は村に立ち寄りながら、全体で距離にして 120km を超えて進み、25 の村を踏破しました。それぞれの村で、女児の選別堕胎に反対する熱意あふれる訴えを行い、村民たちから温かい歓待を受けると共に、女児の選別堕胎をしない、支持もしないという旨の宣誓書も得ることができました。

行進は丸一日続き、解散前にもう一度大集結した 5 万 2 千 3 百人という驚くべき数の人びとが、自身にも他人にも胎児の性別選択を許さないことを約した誓約書に署名しました。多くの人びとがこのように誓約したことは、胎児たちにとって喜ばしいことですが、この誓約が検証されるのは、2011 年の国勢調査の結果を待たなければなりません。それまでの間、変革へのシナリオとして、コミュニティが一丸となって緊急かつ効果的に胎児の性別選択を止め、女児の価値を高めていくような運動を続けていく必要があります。